

教育研究所だより

守山市教育研究所発行

平成27年11月25日 No.196 所長 奥西 光彦
守山市勝部三丁目9番1号 (守山市生涯学習・教育支援センター 愛称:エルセンター3・4階)
E-mail kyoikukenyu@city.moriyama.lg.jp Tel 077-583-4217 Fax 077-583-4237
H P <http://www2.city.moriyama.lg.jp/moriyama-kyoikukenyu/>

「菜の花プロジェクト」の昨日・今日・明日

NPO 法人菜の花プロジェクトネットワーク
代表 藤井絢子

菜の花畑に、入り日薄れ…♪"朧月夜"の童謡に歌われた景色に、心がほっこりします。「昔、三上山から見た景色は、菜の花の黄、れんげの赤、麦の緑で、それはそれは綺麗やった」と、たくさんの方から伺った話が、忘れられません。四十数年前に、神奈川県から滋賀に居を移し、琵琶湖の四季・森・里・田畑・数多の河川を楽しみ、歩く中でも、春の菜の花の話を、どれだけ聞いた事か。子ども達の未来に、どんな地域を残したいか?を考える中で、いつも菜の花の心の原風景が甦ります。

私の活動のスタートは、何ととっても琵琶湖の水環境再生に向けた"せっけん運動"です。私たち生活者も琵琶湖を汚しているという"加害者性"に目覚めた女性中心の、一大ムーブメントでした。その後全国に展開し、更にモンゴル、韓国、中国、台湾、タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシア、ヴェトナム、インド、スリランカ、バングラディッシュなどアジアの国々へも、二十数年琵琶湖の"せっけん運動"行脚を続けてもいます。実は守山は、当時の"せっけん運動"湖南地域のリーダーでした。地域住民が廃食用油回収の任に当り、廃食用油原料のせっけんを使い、広めていたのです。市役所の市民課の窓口には、転居者に"せっけん運動"を伝える為の、せっけんサンプルが置いてありました。

時が経て!1990年代に入り地球温暖化への対応が迫られ、"せっけん"に続く、次のステップに挑戦します。それが廃食用油を原料とする、化石燃料軽油代替のバイオディーゼル(BDF)開発です。周囲の人たちから「無謀だ」との声が上がる中、多くの専門家の知恵の結集で、BDFの実用化にこぎ着けます。1997年COP3京都会議の数年前の事です。"天ぷら油で車が走る"のキャッチコピーでPR作戦も展開しました。更にひとつ大きな気がかりがありました。県内各地に広がる耕作放棄地です。ここに菜種を蒔いて、かつての湖国の様な景観を取り戻し、そして何より安心・安全の食用油(日本では、菜種油の99パーセントが遺伝子組み替えのカナダ産キャノーラ)を学校給食で使いたい、との思いをカタチに行動開始します。1998年、当時の愛東町(現 東近江市)で子どもたちと菜種の種蒔きをし、翌1999年、久しぶりに此の地に菜の花畑が甦りました。~農地に菜種をまき、開花、収穫、搾油・食用。廃食用油回収、せっけん・BDF製造という資源循環のしくみの完成「菜の花プロジェクト」のスタート~ 二十世紀中に間に合った!それから、地域モデル「菜の花プロジェクト」は<循環><共生><環境学習><農業>等、様々な分野にまたがる、分かりやすい仕組み、と評価され四十七都道府県、韓国、中国でも多様な展開を見せています。

守山市でも、赤野井の皆さまの力で諏訪屋敷を含め、菜の花で魅せる取り組みが始まり、本当に嬉しい事です。「菜の花まつり」を通し、楽しむ・学ぶ中で、継続し、多くの方々の関わりで「菜の花プロジェクト」が地域の宝になってほしい。琵琶湖岸の景観菜の花、勝部の祭と繋がる菜種、有機農業の緑肥用菜の花等、多様な視点で、守山ならではの「菜の花プロジェクト」のカタチを子ども達の未来に!あの、かつての美しい春の景観も夢ではない、と感じています。

新しい学びの創造に向けて ～協働的な学びを実現するICT活用～

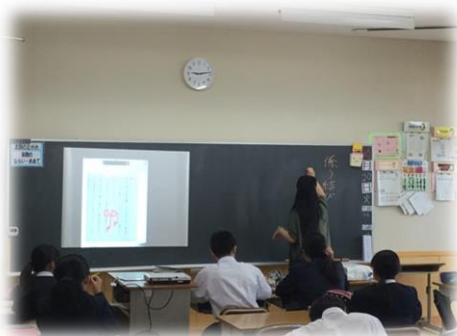
研究員 中西 一雄



「これまでの学び」と「これからの学び」～学びの変革期～

「Study」から「Learning」へ...従来の「知識を獲得する場」から「知識の使い方を学ぶ場」へと授業の、そして学校の在り方が変わりつつあります。子どもたちが生まれながらにして持っている「学ぶ力」を、「社会を生き抜く力」へと昇華する。そんな授業デザインが求められています。

○ICTと黒板の併用 ～デジタルとアナログ、それぞれの良さを生かす～



中学校3年生 国語科の授業風景

新しい学びの場を模索すべくICTを活用した試みが行われています。見やすく、わかりやすく伝えるためにデジタル教科書を、子どもたちの考えや意見を学級全体で共有するためにプロジェクターを、より多彩な発表を子どもたちが行えるようにタブレットを、多様なデジタル機器を活用しつつも、従来の黒板の役割は変わりません。先生がチョークで書いた温かい文字は、子どもたちの中に確かな知識として残ります。

○共に学ぶ子どもたち ～タブレットが紡ぎ出すコラボレーション～

「今日はiPadを使って、算数の問題に挑戦してみよう！」
先生が送信した算数の難問が、子どもたちのiPadに表示されます。答えを出すだけならば個人ノートで十分です。しかしながら子どもたちは、iPad上で図に補助線を書き入れて説明資料を作成します。先生が出した難問は全部で3つ。それぞれのペアが別の問題に取り組み、iPadで作成した資料を使って発表し合い、学級全体で3つの難問を解決する。タブレットは個人からペア、ペアからグループ、グループから学級へと、協働的な学びを広げるツールでもあります。



小学校6年生 算数科の授業風景

○「知識」の向こう側にある「活用」 ～社会を生き抜く力～



中学校1年生 理科の授業風景

「ろうを加熱すると、体積や質量はどうなるか？」
実験中に子どもたちは自然とiPadを手に取り、変化の様子を動画で撮影します。もちろん先生からの指示はありません。

「動画で撮影しといたら後で見せた時わかりやすいから。」
子どもたち自身がICTを学びの中で活用することが、真の「学びの変革」につながると感じます。我々大人にできることは、子どもたちの発想や閃きが実現できる環境をデザインし、サポートすることではないでしょうか。